

エチオピア・ユダヤ人の奇跡のアリヤー —ソロモン作戦—

Operation Solomon: A Miraculous Exodus of the Ethiopian Jews

鈴木元子

文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI

Department of International Culture

Faculty of Cultural Policy and Management

エチオピア北部の山奥に独自のユダヤ教を遵守しながら、数千年間にわたって、自らを地球最後のユダヤ人と信じて暮らしてきた「ファラシヤ」と呼ばれる黒人ユダヤ教徒たちがいた。1991年5月、メンギスツ・ハイレ・マリヤムの独裁主義政権が崩壊する直前、1万4千人のエチオピア・ユダヤ人をたった25時間で、(35機の飛行機が41回飛行)、イスラエルに空輸する、という大脱出が行われた。「ソロモン作戦」と名づけられたこの大規模かつ短期間の内に実施された帰還(アリヤー)は、いったい誰が交渉をすすめ、またどのように準備され、実行に移されていったのか。これまで「奇跡」という一言ですまされてきたこの歴史的偉業の詳細について研究した。

For several thousand years the black Jews of Ethiopia, called "the Falashas," have maintained their faith and their identity in the deep mountains of north Ethiopia. In May 1991, just before the collapse of the Ethiopian government led by Mengistu Haile Mariam, an exodus was carried out. In that exodus some fourteen thousand Falashas were airlifted to Jerusalem within twenty-five hours; thirty-five military and civilian planes made forty-one flights. This paper discusses the details of this Aliya, or rescue from tyranny in the midst of civil war, known as Operation Solomon, which has long been regarded as a sheer miracle. Specifically, the lingering questions as to who did the negotiations, how was it prepared, and for what reason are examined.

はじめに

1991年5月、1万4千人のエチオピア・ユダヤ人が、たった25時間でイスラエルに空輸され、念願のアリヤー(帰還)を果たした。この「ソロモン作戦」(「ミブツァ・シュロモ」)と名づけられた大脱出劇は奇跡と見なされ、世界中に離散するユダヤ人たちに希望の光を与えた。しかしながら、その詳細については関係者のみ知るところであった。そこで、この小論においては、現在筆者が邦訳を手がけている、当時のイスラエル大使アシェル・ナウム氏のメモワール(*Saving the Lost Tribe*)を基に、エチオピアの歴史やアフリカという地域性、また宗教的背景などを鑑みながら、実際、誰がどの機関と如何なる交渉をすすめ、またどのように準備し、実行に移していったのかについて論述していく。

1. エチオピアについて

エチオピアはアフリカ最古の歴史を有する国で、3000年にわたり植民地支配を免れてきた唯一の国として知られている。アフリカ大陸の北東部に位置し、面積は日本の約3倍、国土の3分の2が高地である。人口は6千万人といわれているが、子どもが多いことから、25年後に人口は倍増するだろうと予測されている。1896年にエチオピアの首都となったアディスアベバ(Addis Ababa)には、1958年に国連アフリカ経済委員会(ECA)の本部が、そして1963年にはアフリカ連合(AU)の本部が置かれた。

考古学上の発見によると、人類の祖先は200万年前にエチオピアに住んでいた「ルーシー」といわれているので、エチオピア人たちは自国を人類発祥の地と誇りに思っている。

紀元前980年にシェバの女王マケダが、ソロモン王の宮殿まで遠征隊を率いていったことがある。伝説によれば、この女王の美貌に惹きつけられたソロモン王と彼女との間に息子が誕生したという。聖書にその記述は一切ないが、ソロモン王の血統をもつ、このメネリクI世が、以後3千年にわたる歴代エチオピア皇帝の始祖となった。

20世紀に飛ぶと、1916年から30年まで摂政であったハイレ・セラシエが、ソロモン王の流れをくむ第225代皇帝となる。ハイレ・セラシエは、アムハラ語で「三位一体の力」を意味し、「王の中の王」や「ユダの獅子」を通称に、絶対的権力を掌握していった。



写真1 アディスアベバの国立劇場の前にあるライオン像。統治者「ユダの獅子」の象徴であった。現在は観光名所



写真2 国営エチオピア航空の航空機にライオンのマーク

ところが、国家は1960年代から90年代まで、エリトリア解放戦線(ELF)とのゲリラ戦に身を委ねることになる。1967年にはゴジヤム州の農民が土地所有を求めて立ち上がり、学生たちも検閲制度の廃止や政治的・社会的な変革を求めてデモを起こした。70年代初めには、干ばつによる飢餓が起き、11の地方で30万人が餓死した。72年2月には、陸軍の一部が待遇改善を求めて反乱を起こし、9月には軍部の布告で君主制が廃止される。元皇帝は、新政府による監禁中に死亡。75年に軍部はエチオピアの社会主義化を宣言する。翌年メンギスツ・ハイレ・マリヤム陸軍少佐が臨時軍事評議会の議長となり独裁政治を始める。しかし、エリトリア民族解放戦線(EPLF)とエチオピア人民革命民主戦線(EPRDF)が台頭してきて、内戦が悪化する中、1991年5月にメンギスツはジンバブエに亡命する。このような一刻を争う激動期、すなわちメンギスツ政権崩壊直前に、ソロモン作戦はエチオピア・ユダヤ人のほぼ全員を国外脱出させることに成功したのであった。

2. 北アフリカのユダヤ人

エチオピアのユダヤ人論に入る前に、エチオピアという内陸部に入っていきときの玄関口ともいえる北アフリカ周辺とユダヤ人との関係について、マーティン・ギルバートの『ユダヤ人の歴史地図』を参考に少しまとめておくことにする。

(1) 紀元前2000年頃の初期ユダヤ人の移動

紀元前2000年頃、イスラエル人の祖テラとその息子アブラハムがカルデアから移動したときのルートは、ウル ⇒ バビロン ⇒ マリ ⇒ ハラン ⇒ ハマテ ⇒ ヘブロン ⇒ エジプトのゴセン(ゴシェン) ⇒ ヘブロン(死亡)、であった。

このようにイスラエル人たちがエジプトに寄ったことは確実で、それはおそらくナイル川流域のこの地方、すなわち、ゴセンやオン(ヘリオポリス)、メンフィス周辺が、「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる、水に恵まれた耕作しやすい土地であったからに違いない。

(2) 奴隷状態からの出エジプト：約束の地へ

紀元前1800年から1500年頃にかけて、エジプトのユダヤ人定住地はゴセンであったが、そこにはユダヤ人が強制労働に駆り出されてパロのために造ったピトムやラメセスなどの町があった(「出エジプト記」1章11節参照)。モーセに率いられたユダヤ人たちは、スコトからエタム、そしてエタムの荒野から、マカーやエリム、シンの荒野、そしてレフィディムを通して、シナイ山へと辿って行ったのである。

(3) ダビデとソロモンの王国(紀元前1000年から925年)

この時代、ヨッパ(港町、現在のイスラエルのヤッフォ)はエジプトと交易をしていた。聖書によると、「ソロモンの馬はエジプトとクエから輸入された」(歴代誌下1:16)そうである。ソロモン王はエジプトの王ファラオと同盟を

結ぶためにその娘を王妃とし、ダビデの町に迎え入れたともいわれている。ユーフラテス川からペリシテ人の地方、更にエジプトとの国境に至るまで、諸国の王をすべて支配下に置いていたソロモン王が亡くなると、王国はたちまち分裂していった。そして、ソロモンの子レハブアム王の治世には、エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上ってきた。「彼は戦車千二百両、騎兵六万を擁し、彼がエジプトから率いてきたリビア人、スキム人、クシュ人(クシュはヘブライ語で「エチオピア」)の民は数えきれないほどであった。」(歴代誌下12:3) エチオピア地方の人たちがこのようにエジプトに雇われて兵士として働いていたこともあったのである。

(4) 最初の離散(紀元前722年から586年)とエジプトのユダヤ人

北イスラエル王国が滅びたとき、エルサレムから東方のメソポタミア方面に離散した民もいたが、エルサレムから南西に下ってエジプトのアレクサンドリアや、ナイル川流域のエレファンティネやシエネに逃げのびて、そこに定住する者も少なくなかった。

紀元前320年、エジプトのファラオは3万人のユダヤ人をシナイやキレナイカ、キプロス島の辺境地帯に定住させて、他国の攻撃からエジプトを守っていた。紀元1世紀、エジプトのユダヤ人口は100万人で、その大半はアレクサンドリアに住んでいた。

(新約聖書は、エチオピア女王の高官が礼拝のためにエルサレムに上る記事を記している。遠いエチオピアからエルサレムに往来のあった証拠となる。)

(5) イエメンのユダヤ人

紀元644年、ユダヤ人はイスラムの統治者によってヘジャズ(現サウジアラビア辺り)から追放された。ほとんどのユダヤ人はイエメンに逃れたが、1948年でさえイエメンのユダヤ人人口は5万5千人を数えている。地図を見れば一目瞭然だが、イエメンから紅海を渡れば、現ジブチであり、すぐにエチオピアに入ることができた。交易や避難先を求めて南アラビアを去ったユダヤ人が最初のエチオピア系ユダヤ人ではないかといわれている。メネリクI世がエルサレムからエチオピアに帰国したときに同行してきたユダヤ人が祖ではないかとの説もある。12世紀、「ツデラのベニヤミン」という名の商人兼旅行家は、行く先々で、その地のユダヤ教徒について調べ、その生活や伝統について書き残した(1165年から1173年)。アフリカではエジプトと特にその都市アスワンを訪れ、またアラビア半島南端のイエメンにも足を運んでいた。

3. エチオピアのユダヤ人

(1) ソロモン王とシェバの女王の伝説

エチオピア人たちは聖書(列王記上10:1-13)にあるシェバの女王物語の翻案をもっていた。シェバとは、アラビア南西部にあった古代の文明国のことである。『聖書辞典』には、「シバは、南アラビアの民並びにその地から紅海を経てアビシニア(エチオピア)に植民した民を

包括する名称である」と記されている。シェバの商人は、自国の黄金、宝石、香料、およびインドやアフリカの商品を、フェニキヤなどの地に運んで交易にあっていた¹⁾。

聖書ではシェバの女王が帰国するところで終わっているが、エチオピア人の伝説では、女王とソロモンが一夜を共にし、帰国後に男の子を産む。事の詳細は、ソロモン王が女王に塩辛い物を食べさせ、夜中にのどが渇いた女王が水と交換にソロモンの望みを何でもかなえるはめになったからだという。シェバの女王はイスラエルの神を受け入れ（ユダヤ教徒となり）、イスラエルとエチオピアの間に緊密な関係が始まる。息子が少年になると父親から学ばせるためにエルサレムに送り、成人になるまでソロモン王の宮殿に住ませた。帰国時には、ソロモン王がイスラエル全部族から70人の戦士を選んで護衛をさせ、王子をエチオピアに帰したと伝えられている。エチオピアの口承伝説をまとめた書物『ケブレ・ナガスト』（王たちの栄光）によれば、エルサレムを去るとき、この青年（メネリク1世）はマウント・シオンにある至聖所から、モーセの十戒の石版を納めた「契約の箱」をもち帰ったとされている。そして、エチオピアに帰国の途上、金曜日の晩に川を渡った人たちがエチオピア人キリスト教徒となり、安息日には何もしてはならないという戒律を守って川を渡らなかった人たちがユダヤ教徒の「ファラシャ」になったというのである。

ファラシャとは、エチオピアの言葉で「外国から移住する」の意味なので、現地エチオピア人から見て「外国からやってきた者」だったのではないだろうか。ファラシャ自身は自分たちのことを「ベイト・イスラエル」と呼んでいるが、それはヘブライ語で「イスラエルの家」を意味する言葉である。

(2) ハ・ダニ伝説

9世紀にエルダ・ハ・ダニ（Eldad ha-Dani）というアラビア系のユダヤ人がいた。彼は旅行家で、中東に散在するユダヤ人共同体を訪れてはその話を書き留めていた。それによれば、ソロモン王が死に、北イスラエル王国と南ユダ王国に二分され（紀元前922年頃）、戦争が起こると、イスラエル部族の1つであったダン族はユダヤの地で兄弟部族と戦うことを拒否し、別の場所に定住しようと決断した。彼らはエチオピアのナイル川上流、いわゆる「クシュ」と呼ばれていた地域に辿り着き、そこに定住したというのである。そこでファラシャの存在は、ちょうど北イスラエルの10部族がアッシリア捕囚になった紀元前722年頃まで遡ることになる。

南ユダではバビロンに移送されなかった者は、総督ゲダルヤによって統治された（エレミヤ書40:7）が、直に彼も暗殺されてしまう。ファラシャの宗教的指導者の話によると、ゲダルヤが暗殺されると、ユダヤ人共同体の300人のリーダーたちはエジプトに逃亡し、ナイル川流域のアスワンのエレファンティン島にエルサレム神殿をモデルにした立派なシナゴークを建てたという。そのシナゴークで、彼らは450年間にわたって燔祭を献げ、礼拝をし、戒律を遵守してきたが、それは共同体の指導者僧のエリアザールとオンが意見を異にするまでのこと

であった。オンは燔祭の伝統を保持したかったが、エリアザールがそれに反対した。燔祭はエルサレムの神殿ですることであって、他のどこでも行うべきものではないと論じたのである。オンがその儀式を継続すると強く主張すると、エリアザールは哀悼の印として衣を裂き、共同体の一部を連れてエレファンティネを去り、ナイル川に沿って南方に向かった。共同体の残りの者たちは、僧オンと留まったが、彼が死ぬと、エジプト人が彼らを迫害したので、アレクサンドリアまで逃げた。そこでも迫害されたので、南に逃げ、エチオピアの境界近くの村であるダフタラまで行き、そこに20年間滞在した。ダフタラでは、ハンナという名前の女王を擁した。彼らが攻撃され、ハンナが死ぬと、一団はさらに南に入り、クワラに到達した。一方、エリアザールを指導者とする最初の集団は、紅海の近くの北エチオピアのタケジ川を渡った。ユダヤ人女性たちを探していた人々は、最初の集団がゴングダールのチェガに着いて、そこに多くのシナゴークを建てたことを耳にした。（この伝説の真偽については文献等が乏しいため、今後も引き続き研究する必要がある。）

(3) ファラシャ起源の諸説

ファラシャの起源について諸説をまとめてみると、モーセに率いられて出エジプトしたときにエジプトに残留し南下したユダヤ人、メネリク1世に同行してエルサレムからやってきたユダヤ人、またアラビア半島の南部シェバからアビシニア（エチオピア）に移住したユダヤ人、さらには、ヌビアからエジプトを守るために反乱を起こしてエレファンティン島に定住したユダヤ人傭兵の子孫、ユダヤ人からユダヤ教の教えを聞いて改宗したアガウ族等々の説があるが、どれか1つの説というのではないだろう。「失われた十部族」のダン族の末裔と信じている者もいる。4世紀に大規模なキリスト教への改宗があった後、ユダヤ教を守った者は迫害を受け、タナ湖の北部の山岳地帯に逃れた。ファラシャがアムハラ族の支配に抗して、民族の独立と信仰保持のために何度も戦争を起こし、エチオピア軍が征討軍を出したことは歴史的記録として残っている。現在では信仰的に迫害されることはもうないが、「ファラシャ」と聞くと「目に眼力、霊力をもつ人々」と、病気を癒したり予知したり、災害を防いだり等の霊能力をもつ人たちと一般エチオピア人には見られているようである。

(4) カムアウト

世界のユダヤ人たちがファラシャについて初めて知ったのは、ロンドン・ミッシヨナリーズというユダヤ人改宗を目的とした宣教団体が出した1つの報告書からであった。パリの「世界イスラエル人同盟」（the Alliance Israélite Universelle）がそれを知ると、早速資金を調達して、アムハリット語に堪能なフランス系ユダヤ人でオリエント学者であったジョセフ・ハレヴィ（Joseph Halévy）教授を、1867年に調査のためにエチオピアに派遣した。ハレヴィは、シミアン人たちの間に入って困難な旅行を続けた。「ダビデの星」が家々の戸口に描かれた、孤立した村に行き当たると、藁葺きの小屋よりもっと小さなシナゴーク（ユダヤ教の礼拝堂）の入口と天井の上にも

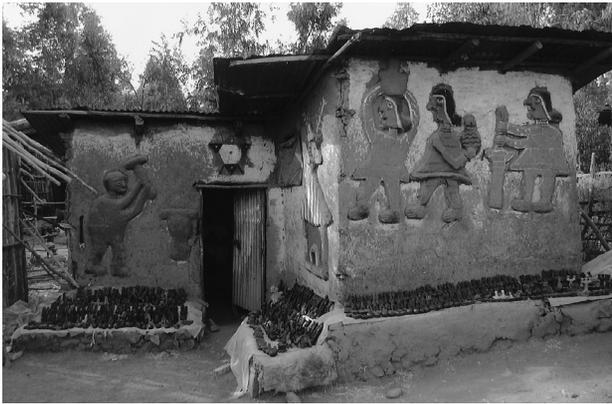


写真3 現在残存している家の戸口の上にも「ダビデの星」が見受けられる。

「ダビデの星」があった。

モーセ5書のオリト(トラー)も目にしたが、それはファラシヤにとって神聖なものであった。ハレヴィはユダヤ教の儀式と日常の宗教的行為がいかに厳格に守られているかを見、さらには迫害や追放および隔離に直面しながらも、数世紀にわたって信仰が保持されてきたことを知った。ファラシヤの人たちは、最初ハレヴィがユダヤ人であるということが信じられなかった。余りにも長い間、世間から隔絶されてきたので、自分たちこそ地上で最後のユダヤ人だと考えていたからである。

(5) ファラシヤの宗教的特色

ファラシヤの宗教的指導者によれば、その信仰は次のようなものである：「我々はイスラエルの神を信じる。神の絶対的唯一性を信じる。シナイ山で与えられた律法を基に、ユダヤ民族が神の選民であることを信じる。我々は報酬と罰を信じ、その後、天国と地獄、死者の復活と救い主の到来、シオンへの帰還と捕囚者たちが再度集められることを信じる。」

一般のユダヤ教とファラシヤのユダヤ教との相違点は、彼らが地理的に孤立していたために、ミシュナやタルムードやラビ文学が伝わらなかったという点から生じている。ファラシヤはジジット、テフリン、キッパのようなミズヴォット(戒律)を行わないし、戸口にメズーサを掛けることもしない。パール・ミズバ(成人式)も祝わない。しかし、男児は生後8日目に割礼を受ける。月経の期間中、女性は村はずれにある小屋に留まり、終われば水に浸って身を清めてから家に帰ってくる。出産のための特別な小屋もあるが、出産後の清めの時期が過ぎれば、小屋は燃やしてしまう。ファラシヤたちは絶食をするし、ターニット・エステル(プリム祭に先立っての断食)も2回行うが、プリムやハヌカなどの休日を祝ったりはしない。それらは神殿が破壊された後に制定されたものだからである。他方、トラーに記された安息日は厳格に遵守していた。ファラシヤの暦はイスラエルのラビの暦とは異なるが、新年祭(ローシュ・ハシャナー)を祝い、それをベルハン・サラカ(上ってくる光)と呼ぶ。贖罪の日(ヨム・キプー)にも絶食する。仮庵祭(スコット)は、バララ・マサラット、すなわち「陰の祭」と呼ばれている。8日間の収穫感謝祭では、収穫の1部がケシムに

供される。仮庵の小屋は建てない。過越祭では、初日に断食をし、晩に犠牲を献げる。次の日は休みで、その後の1週間はパン種を入れないパンを食べる。エチオピア人は好んで生肉(牛刺し)を食べるが、ファラシヤ人は絶対に生肉は食べない。ファラシヤ以外の人が屠殺した肉も食べない。

(6) ファラシヤ救出運動

ハレヴィの弟子でポーランド生まれのジャック・フェイトウロヴィッチ(Jacques Faitlovitch)は、1904年にエチオピアを訪れ、キリスト教伝道の脅威を知って、それに対抗するためにユダヤ人の支援が必要であると訴えた。彼は村から村へと訪問して行く移動学校を始めたが、1924年頃、アディスアババにファラシヤの子どものための寄宿学校を創設した。

「ユダヤ機関」(the Jewish Agency)は、1954年にエリトリアのアスマラに最初のユダヤ人学校を開設した。その学校には、7人のケシムを含む、33人の学生がいた。1956年までに、エチオピアのユダヤ人学校は増えていった。そして、1950年代には、10代の若者27人が、イスラエルのケファー・バティア(Kefer Batyah)で教育を受けていた。しかし、彼らは、移民または認可されたユダヤ人としてではなく、学生ビザで渡航していた。ラビの上層部は、学生たちを、タルムードの用語で「疑わしい(サフェク)ユダヤ人」と見なしていた。

1970年代初期までユダヤ教徒として認知されなかったが、イスラエル移住を望むファラシヤたちの間に、ある運動が起きた。それは、彼らが「アリヤー」の有資格者であるということであった。百人以上のエチオピア系ユダヤ人たちがイスラエルに住んでおり、一般大衆にはまだ知られていなかったが、若干のリベラルなイスラエル知識人には有名な運動になっていった。特にエチオピアではひどい飢饉が起きていたので、イスラエル政府がファラシヤの苦難を解決して、「失われた部族」を飢饉から救出するように求めたのである。

ツザハラ(Tzahala)のヘジィ・オヴァディア(Hezy Ovadia)という職業軍人がこの運動を導いていた。イエメン系ユダヤ人のオヴァディアは、エチオピアで生まれ育ったが、1930年代中頃にすでに帰還していた。ファラシヤの親戚たちが、イスラエル移住に手を貸してくれとせき立てていたのである。彼は、スファルディ系ユダヤ人チーフ・ラビのオヴァディア・ヨセフと会談することにした。このとき、9世紀の旅行者ハ・ダニの報告書と、16世紀にエジプトのユダヤ人共同体のチーフ・ラビであったデイビッド・ベン・ジムラの裁定書を贈った。この2冊はファラシヤを「失われた十部族」のうちの1つ、ダン族出身のユダヤ人と認めるものであった。

とりわけ、16世紀のベン・ジムラの裁定は意義深い。彼は、「ハラハ」(ユダヤの法)にかけては世界最大の権威者と考えられていた。自分と自分の息子たちはユダヤ人であると主張したアビシニア人女性が彼の前に連れて来られた。戦争で捕らえられ、夫は殺されたが、エジプト系ユダヤ人によって救われ、息子たちは今、エジプトの

ユダヤ人共同体の中で結婚しようとしていた。彼女は、「アビシニアの山にある古代イスラエル人王国」に属していた、と証言したのである。ベン・ジムラは彼女の言葉を受け入れた。「アビシニアの王たちの間に絶えず戦争があったことはよく知られている。そこには、3つの王国があり、アラブ人の王国、アラム語を話すキリスト教徒たちの王国、それにダン族の古代イスラエル人たちの王国がある」と、裁定を下したのである。

1973年にヘジギが提出した2つの文書については、以下の裁定(判決)が公表された。

これらのファラシヤたちは間違いなくダン部族の……、彼らは我々があがない、回復するように命じられているユダヤ人たちである。系図だけの問題では不安要素もあるが……ファラシヤは多民族同化の危機から救出されなければならないユダヤ人で、彼らのエレッツ・イスラエルへの帰還は急がれねばならない。我々は神聖なトーラーの精神で彼らを教育し、ホーリー・ランド建設にも加わってもらおう。……「あなたの子どもたちは自分の国に帰って来る」(エレミヤ書31:17)。……たった一人のユダヤ人の魂を救うことは全世界を救うことである。……イザヤの預言が成就することが神の御意志である：「主に贖われた人々は帰って来て、喜びの歌をうたいながらシオンに入る。」(イザヤ書51:11)、「その日が来れば、主は再び御手を下して、御自分の民の残りの者を買戻される。彼らはアッシリア、エジプト、上エジプト、クシュ(エチオピア)、エラム、シナル、ハマト、海沿いの国々などに残されていた者である」(11:11)、「新月ごと、安息日ごとに、あらゆる国民は来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝するであろうと主は言われる」(66:23)。

この判決により、イスラエル政府に根拠が与えられ、1975年にファラシヤに以下のすべての特権と「アリヤー」(帰還)の権利が与えられた。すなわち、市民としての十全たる権利、イスラエル社会に吸収されていくために必要な支援、住宅のサポートや就職口の斡旋、毎月の給付金と、エチオピアでは考えられないような生活水準の保証であった。

4. モーセ作戦

1974年、エチオピアには2万5千人以上の黒人ユダヤ教徒がいた。200人はすでにイスラエルに向かっていた。イスラエルでは1972年にスファルディ系のラビ長がファラシヤもユダヤ人であると認めていた。75年にイスラエルの内閣委員会が、「帰還法」(ユダヤ人であれば誰でもイスラエルに帰還して市民になれる権利)はファラシヤ人にも適用されると規定した。77年、イスラエルのメナヘム・ベギン首相がエチオピアのユダヤ教徒をイスラエルに迎えるように促した。84年から85年にイスラエル政府は「モーセ作戦」を実行して、約8千人のエチオピア・ユダヤ人がスーダンからイスラエルに運ばれた。

CIAの協力とモサド(イスラエル秘密諜報機関)により実行された。ファラシヤたちはエチオピアからスーダンへの道のり600キロを歩いてやってきた。スーダンにいるイスラム教徒はユダヤ人たちに協力しているのを見られなくなかったので、秘密裏に行われた。大勢のファラシヤがイスラエルへの脱出を試み、8千人が成功したが、残りの者たちは、旅の途中で死んだり、戻ったり、メンギスツの部隊に捕まってしまったりした。1984年6月、マスコミに知られて作戦は終わり、怒ったメンギスツはファラシヤのイスラエル帰還を全面停止してしまっ

5. ソロモン作戦

(ソロモン作戦そのものについては、ナウム元大使の*Saving the Lost Tribe* から一部抜粋させていただく。)

1990年11月11日、フィンランド大使の任期を終えたアシェル・ナウム氏が、エチオピアのイスラエル大使に着任する。首都のアディスアベバに到着するや否や、メンギスツ・ハイレ・マリヤム大統領と会見し、ファラシヤ(「ベイト・イスラエル」)をイスラエルに移住させる交渉を開始する。前任のイスラエル大使メイヤー・ヨッフエは、ホテルのトイレに爆弾を仕掛けられ、それが実際に爆発したことから帰国してしまっていた。エチオピアでは、武器を供給してくれていたソ連が弱体化するにつれ、メンギスツは内戦で敗北色を濃くし、ファラシヤを解放する代償に武器を求めようとしていた。イスラエルとは再度外交関係を樹立し、すでにイスラエルに移住していた家族と合流する目的ならば、数百人のファラシヤを出国させることには同意していた。しかし、メンギスツは独裁者で、その統治下において数百万人のエチオピア人が殺害されていたのも事実であった。

イスラエルのバックに控えていたアメリカ²⁾は、エチオピアに特命全権大使を指名するといってくれていた。アメリカのユダヤ人たちは、ファラシヤのアリヤーを強く望んでおり、「エチオピア系アメリカ人・アメリカ協会」の組織も出来上がっていた。大使は、メンギスツとの第1回目の会見時に、ファラシヤ解放の見返りとして、農業や畜産学の教授陣と医療ワーカーを訓練する支援プランを申し出たが、メンギスツは興味を示さなかった。

ファラシヤは自分たちが地球上最後のユダヤ民族と信じて、北部の山脈に隠れ住んでいたが、聖地帰還の時がついに到来したと信仰的に受け止めて、アディス市のイスラエル大使館にゴンドールからぞくぞくと集まっていた。その数は、優に千人を越していた。「ユダヤ機関」とJDC(共同分配委員会)、および困窮しているユダヤ人を支援する在米団体からやってきた人たちが、ファラシヤの登録作業、IDカードの発行等、あらゆる面倒をみてくれている。JDCが彼らの生活や医療および食料等に必要な経費を全て出していたのである。俄仕立ての学校も作られていた。藁葺き屋根の丸いツクルスと呼ばれる建物に、1クラス50人で23クラス、4交替で4千人もの生徒たちがヘブライ語やアムハリック語や算数を勉強していた。

ファラシヤの移住問題については、エチオピア政府側

ではカサ・カベダが担当していた。ナウム大使はイスラエル側の好意を態度で示そうと、灌漑プロジェクトやエチオピア織物に関心をもつ英国人投資家³⁾のこと、負傷した軍人をイスラエルの病院で治療すること、ダーラック島における水浄化施設の建設などについて根気よく語り続けた。同時に、アメリカ人特殊任務チームのアディス入りも要請していた。が、一方のカサは、イスラエルから搾り取ることをもくろみ、ファラシヤに与えるビザの数を減少させていった。カサはイスラエルに飛び、積極的に政治家に会うと、メンギスツ政権の立場を擁護して回った。「もし反政府軍が政権を取ったら、エチオピアはイスラム教国になり、イスラエルの敵国になるだろう。メンギスツのキリスト教的体制を支援することが、イスラエルの国益になるのだ」と論じていた。

アディスに着任したとき2万2千人いたファラシヤ難民の数は、4カ月たっても減らなかった。出国していた数と同数の出産児と新来者が加わったからである。内戦の戦況はますます悪化していった。反政府軍（エリトリア人民解放戦線とティグレ人民解放戦線）が力を増強していったのである。スーダン人とリビア人は武器を供給し、エリトリア人古参兵が反政府軍を訓練していた。メルカート市場に客はもうおらず、新しい商品も無ければ、ネズミが走り回っているだけだった。夜にはそこにハイエナが丘から降りて来てのさばっているといううわささえあった。脱走兵や政府高官らが、兵器を、戦車でさえ、反政府軍に売っているという話さえ耳にした。

状態は悪化し続け、カサとミルシヤ（内務大臣代理）たちは、移住申請書に対して難問を吹っかけてきたので、出国者数は徐々に細っていった。イスラエル大使館は、国が崩壊する前にファラシヤ全員を避難出国させることを考え始めた。

ルブラニ（イスラエル国防省高官）とユダヤ機関局長のシムハ・ディニッツはワシントンに飛んで、マイケル・シュネイダー（ユダヤ分配委員会の副委員長）およびネイト・シャピロ（エチオピア系ユダヤ人のためのアメリカ協会会長）に相談することにした。ワシントンにあるイスラエル大使館公使のマイケル・シロを通じて、在米のユダヤ人諸組織と共に、ファラシヤ全員を避難出国させる支援を要求する嘆願書をホワイトハウスに提出した。ネイト・シャピロがルディー・ボシュウィッツ上院議員を大統領の特派大使に人選し、書簡を持参させることをディニッツが提案した。

エチオピア国会の会期中、重大な事件が起きた。反政府軍が、アディスから60マイルのところにあるアンボ市を征服してしまったのである。ファラシヤたちの完全な避難出国を、急がねばならなかった。イスラエル国防軍参謀長代理のアムノン・シャハクが、秘密裏に、民間服を着て、ルブラニに同伴されて飛んできた。アムノンは、イスラエル大使館とアディスのボレ国際空港間の4マイルにわたる道路のセキュリティについてよく調べた。大使館には、水、燃料、食糧、現金、ジェネレーターと薬を備蓄した。補強材がイスラエルから空輸され、デイビッドは拡張作業に励んでいた。大使館の敷地を囲む塀が補強された。大使は週1回スタッフ会議を開き、会議後には毎回ファラシヤ救出特別緊急委員会にその報

告書を送った。この委員会は、退去出国の詳細な計画を練るために、イスラエル政府やユダヤ機関そしてイスラエル国防軍と協働する体制をとっていた。ハウデック（アメリカ側代表）は、10日から15日間で全てのファラシヤを退避出国させるために、ボーイング機をイスラエルへ毎日2、3機飛ばす案を提起した。ナウム大使には別の考えがあった：「私達は、2、3日間で完全に退去させたい。短期間なら、アラブ人たちを怒らせておけばいい。誰かに勘づかれる前に、ファラシヤを全員連れていってしまおう。それも5月15日に和平協議が召集される前に実施するのだ」。

アメリカ大統領の特別大使ボシュウィッツがメンギスツと会見し、次のことが決まった。エチオピア政府は、ファラシヤを三つの条件下で、出国させることに同意したのである。第一に、その作戦は秘密裏に行うこと。第二に、フライトにはエチオピア航空（内戦のために開店休業中）をイスラエルの管轄下で使用し、ファラシヤ一人当たりにつき正規の航空運賃を支払うこと。第三に、エチオピアに「気前の良い財政支援」をすること。

関係者の身の安全を守るために、イスラエルの外務省は各新聞社の編集者を召集して、ファラシヤ全員がエチオピアから無事に脱出するまで決して報道しないようにと同意を求め、各社ともがこれに応じた。

カサは、ルブラニが5月8日に入国することを許可した。8500万ドルから1億ドルが、2、3日間の空輸代として、秘密裏にカサが求めてきた数字であった。ハウデックは、恐喝まがいだとその金額に憤激した。アメリカは、メンギスツがそれを使って武器を買うのではないかと懸念した。ルブラニは、イスラエルの飛行機を飛ばすことを提案して、2500万ドルから3000万ドルを見積もった。

カサは、ファラシヤの男性をエチオピア軍に徴兵すると脅迫めいたことまでいってきた。その後、全てがうまくいかないと分かると、「差額の平均を取ろう」と、中間値の6250万ドルを要求してきたが、ルブラニは拒絶した。5月17日になり、あらゆる大混乱が起こる前にファラシヤたちを出国させる機会は、あと10日間だけになっていた。ルブラニは、イツハク・シャミール首相と会談し、イスラエル側はもう数百万ドルを上乗せして、3500万ドルを提示することにした。この取引と退去名が、「ソロモン作戦」と名づけられたのは、この時点であった。ところが、そうこうしているうちに、メンギスツはジンバブエ大統領ロバート・ムガベの勧めで、親族7人を連れて亡命してしまった。

アメリカのブッシュ大統領（現大統領の父）から5月22日にファックスが届き、エチオピア政府に圧力をかける形となる。1つの作戦で、ファラシヤ全員を出国させることができると知った途端、準備が始まった。イスラエルの外務省からの代表リューヴェン・メルハヴ、イスラエル空軍の代表者、およびユダヤ機関の代表者によって率られる委員会が結成された。

政府機関はイスラエル中の移民吸収センターを空にして、その他に32のホテルを借りることを計画した。彼らが入国するや否や、移民を登録し、航空機1機が着陸する度に数百人を運べる輸送手段を準備し、数時間

何も食わずに到着した人々に食事をさせる等の手配を万端整えていった。大使館では、アディス周辺に散っていた15000人の人々を、2時間から4時間以内に、緊急連絡網を使って、大使館の敷地内に集合させる仕事に直面した。この計画のために、ユダヤ分配委員会のコービィ・フリードマンとそのチームは、古代イスラエル時代のユダヤ地下組織のネットワーク・モデルを用いた。フリードマンは中尉を任命した。そして、それぞれの中尉が10家族がそれ以上の家族に対して責任を持つ仕組みであった。中尉10人で1人のキャプテン、キャプテン10人で1人の指揮官という組織にし、一人の指揮官はファラシャが住んでいた5地域の内の1地域に対して全責任を負う。全部で5名の指揮官は、フリードマンの下で働く「アディス大将」に報告をする。このシステムは2回試され、2回ともよく機能した。大使館の敷地に全ファラシャたちを3時間以内で集合させることができた。可能な限り、バスもチャーターした。運転手たちには、必要なだけ何時間でも運転してもらい、そのために幾分多めの代金が支払われた。大使館から空港までは約6キロ半であった。往復に1時間かかると見積もった。空港では、一度に3000人収容できる場所が用意された。アディスではガソリンが不足していたので、イスラエルの飛行機はテルアビブとアディスの往復に必要な燃料を搭載していなければならなかった。

5月23日、エチオピアの新任外務大臣のテスファイエ・タデセが執務室にナウム大使を案内した。「私達は今朝、決議を通過させました。5月27日より以前に、ファラシャ全員を出国させることを許可します。」

大使のホテルのスイート・ルームが、オペレーション・ソロモンのハブ基地になった。大使達はソロモン作戦を翌朝の5月24日金曜日に開始することを決定した。「イスラエルの飛行機は、明日午前10時に着陸し始める。」

ファラシャ大脱出についての情報は反政府軍にも送られ、彼らは「作戦に干渉することも、妨害することもしない」と約束した。この知らせを聞いたイスラエル大使館側の喜びはひとしおだった。ミルシャにとっての難問は、出国させるために、15000人分のパスポートとビザを用意することであった。平常なら、内務省は一日で100のパスポートを交付することができたが、たとえ内務省の役人が明日現われたとしても、数時間の内に、どうやって15000のパスポートを発行することができるのだろうか？

大議論の末、彼はフェルドマン（ユダヤ機関スタッフ）の提案を受け入れた。すなわち、ユダヤ機関は、ファラシャ全員のリストを空港で移民局当局に手渡す。同リストにより、ミルシャは、「イブソ・ファクト」（事実上）パスポートを発行する、すなわち、作戦が遂行された後で発行する。（もちろん彼らは決してそうしなかったが。）ミルシャがアディス市警のサポートを得てくれたので、午後9時の外出禁止時間から作戦を遂行することが可能になった。また、イスラエル空軍士官が、エチオピアの航空管制官と共働する手はずも整えてくれた。午後11時に、イスラエル大使側はリストを完成して、全てが整ったことを確認するために、翌朝7時半に大使はミルシャと落ち合う約束をした。ちょうどそのとき、メルハヴが電

話をかけてきた。「ソロモン作戦は明日午前10時に始めることが、首相によって承認されました。歴史的な瞬間です。あなたはこのようなミツヴァ（善行）に参加できて祝福されていますね。シャローム。」

5月24日金曜日午前6時に、アミール・マイモンは空港から大使館までの道路状況をチェックしていた。すべてが静まり返っていて、道路は閉鎖されてはいなかった。JDCのコービィ・フリードマンとアミ・バーグマンは、ファラシャを集めるようにという指示を受け取った。7時30分、大使はマイモンとデイビッドと一緒に、ミルシャのオフィスに行った。ミルシャは建物の中にぽつんと1人でいて、秘書さえいなかった。彼は夜の間、この作戦のために必要なすべての人々に連絡して、協力を得ることができたと話してくれた。

8時30分、大使たちはミルシャと共に空港に行き、そこで余りにも多くの飛行機が頭上を飛んでいるので、航空管制官がパニック状態になっているのに気づいた。彼は何が起きたのか知らなかったのである。ミルシャは事を説明し、空港の北東のエリアをイスラエルの飛行機のためにあけてもらった。

10時、ボーイング機2機が着陸した。1機は飛行場の遠い端の方に向かうように指示された。200人の「ゴラニ」（エリート奇襲部隊）が降りてきた。彼らはみなこの任務を自発的に引き受けた者たちだった。一部の兵隊の中には先にイスラエルに移住したエチオピア系ユダヤ人も混じっていた。2機目のボーイング機は、最初に避難させる予定の病人や高齢者を運ぶ病人用飛行機であった。この航空機は、また、数十人のユダヤ機関の役人や、ディヴォンを含む8人から成る外務省職員チームも乗せてきていた。数分後に、もう2機の飛行機が着陸して、滑走路の中央に停まった。もっと多くの飛行機が北方の山の上に現われた。後に、この光景は全くハリウッド映画のセットを見ているようだったと、ナウム大使は述懐している。

10時30分、護送部隊に先導されて大使館まで戻ると、そこには大群衆の姿が見えた。フェルドマンとジムナ（ユダヤ機関スタッフ）が見積もっていた1万5千人をはるかに超えていた。2万人から2万5千人の人々が、つまり、ファラシャと一緒に出国したい隣人たちまでもが、叫んだり、大使館の門に向かって押し合いへし合いをしていた。ファラシャを空港に連れて行く貸し切りバスがもたもたして、作戦は遅れた。交通整理をして道路をあけるのに、警察を呼ばなければならなかった。11時30分、カザは電話で、「金を受け取っていないのに、フライトは出せない」と、作戦停止を要求してきた。ルブラニが電話に出た。「カザ、これはジェームズ・ボンドの映画じゃないんだ！」といった。「アタッシュケースに百ドル札を詰めて、3500万ドルを運んだりはいしない。今、ニューヨークは朝の5時だ。あと4時間でアメリカの銀行が開いたら、金を電子送金する。」

12時30分、最初のバス2台が構内から出発していた。ゆっくりと、苦勞しながらも、群衆を通り抜けて走り去った。バスの横から落ちそうになっている者や、バスの上によじ登っている者もいた。警察は何とかそれらの者を降ろした。定員40席のバスが、70人から

80 人の人々を毎回運んでいたのである。彼らに手荷物はなかった。「着のみ着のままであなさい。必要な宗教上の物品以外に何も持ってこないように」といわれていたからである。

1 時 15 分、第一機が離陸した。300 人のエチオピア系ユダヤ人が搭乗していた。午後遅くまでに、ソロモン作戦は順調に運んでいった。

ユダヤ機関のシムカ・ディニッツ会長とルブラニは、1 か月前にニューヨークで 3500 万ドルをすでに集めていた。彼らは、ユナイテッド・ジューイッシュ・アピール (UJA) や、主要なユダヤ慈善団体の執行部と会談して、資金の必要性を説明したのである。それが身代金であることは認めざるを得なかったが、歴史を通じて、ユダヤ人の生命をあがなうために身代金を払ってきたとディニッツは説いた。UJF のマーティー・クラアール副会長は、博愛主義の諸団体に呼びかけて、たった数日でその金額を集めていた。イスラエル政府は、作戦自体にかかる費用を引き受けてくれた。3 時に、ルブラニとカサとナウム大使は、送金の問題を解決するために会談した。アディスの午後 3 時は、ニューヨーク時間で午前 9 時だった。アディスと、エルサレムと、ニューヨークのチェイス・マンハッタン銀行との間を、何度も電話をかけて調整したが、カサが提示した口座番号は、公式の「エチオピア政府」の銀行口座ではなかった。

カサがやっと正しい口座番号を提示するのに、2 時間以上を要した。イスラエル大使館側は、「エチオピアの合法的な政府」以外、誰もその金に手を触れられないという確証を得るのに腐心した。ロンドン和平協議の後、その政府が合法的、かつ認可された政府として承認されて初めて使える銀行口座であった。

午後 6 時、ヒルトンを出て空港に行くと、3000 人以上のエチオピア・ユダヤ人がもう出発していた。(第一機はすでに 4 時 45 分にベン・グリオン空港に着陸していた。) ファラシャたちは、エルサレムに帰還することをまさに神の御業、神による神聖なる救出と考えていた。老いも若きも祝祭用の服を着て、その上にシャマスをかぶり、顔は敬意と畏怖に満ちていた。航空機の方に向かって、ユダヤ機関の職員に導かれて行進していく彼らの姿は、天国に向かう白い雲のようだった。

彼らは互いに詰めて、床の上に座った。航空機の機内は、多くの乗客を乗せられるように、座席や他の備品がみな外されていた。通常、ジャンボ・ジェット機に、500 人弱の乗客を搭乗させるのだが、このときばかりは 1087 人とギネスブックに記録された。

夜になっても、バスは大使館と空港の間を往復し続けていた。飛行機は着陸するとすぐに人々を乗せて、闇夜の中、離陸していった。誰もがノン・ストップで働いていた。ゴラニたちは、交代で大使館の様子を見に来た。夜 11 時過ぎ、マイモンが電話をしてきて、6250 人のファラシャがすでに出国したことを告げた。夜間になって事が迅速に運ぶようになったのである。

5 月 25 日土曜日、午前 6 時 30 分、「あと、実際 1 時間で作戦は終了します」とマイモンが大使にいった。残っているファラシャはあと千人足らずであった。しかし、作戦の指揮官であるシャハクは、最後の 2 機は 11

時に飛ばすことを決めていた。市内に散っていたイスラエル人チームとアディスにいるアメリカ人ボランティアたちが、乗り遅れないように気をつけたかったからである。10 時 30 分、大使館付き運転手のコナタは、大使がソロモン作戦に参加してくれた職員全員と別れを告げられるように、空港まで車を出してくれた。アディスに残ることを決めた大使に、ユダヤ機関、JDC、IDF (イスラエル国防軍)、ルブラニ、そして外務省の同僚との別れのとかがきた。

ソロモン作戦は、5 月 24 日金曜日午前 10 時に始まり、5 月 25 日土曜日の午前 11 時をもって完了した。正確に、それは 25 時間の出来事であった。総数 14200 人の黒人ユダヤ教徒がアディスアベバからベン・グリオン空港まで空輸された。軍機と民間機の合わせて 35 機が、41 回飛んだ。ある一時は、飛行機 28 機が空中を飛んでいた時もあった。片道の飛行距離は 2400 キロで、フライト時間は約 4 時間だった。

イスラエル空軍は、エリフ・ベン・ヌン指揮官の下で、作戦の準備に 6 週間をかけていた。敵の領土近くを通過するので、飛行機は記章なしで飛んだ。140 人の移民が医療を必要としていた。その中には、作戦の途中で、10 人の妊婦が 11 人の赤ん坊を出産した。飛行中に、リベ・マモーという名前の女性が助けを求めてきた。まさに出産直前だったのである。ハダサ病院のダニ・ベザレル医師が彼女のところに行き、白いシャマスで覆ってあげた。ベザレル医師がリベを診断していたときに、双子の女児が生まれた。リベは長女をイスラエラと名づけた。さぞかし、エレミヤの預言が成就したような光景であったろう。

「主よ、あなたの民をお救いください。イスラエルの残りの者を。」

見よ、わたしは彼らを北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。

その中には目の見えない人も、歩けない人も、身ごもっている女も、臨月の女も共にいる。

(エレミヤ書 31 : 7 - 8)

アシェル・ナウム大使はソロモン作戦をこう述懐している：「我々ユダヤ人は 2 千年以上も苦悩してきた。常にマイノリティであり、決して多数派になったことはなく、平等権を剥奪され、苦勞に次ぐ苦勞の中、自分の身は自分で守って自活してきた。歴史を通じて、ユダヤ人の『あがない』(「買い戻し」・「救出」)は、天からの至上命令であったのだ。」

おわりに

遠い昔、ファラシャたちは聖地エルサレムを目指して信仰により歩き出したときがあった。出エジプトのとき海に道ができたように、奇跡が起きると信じていた。しかし、テオドール皇帝と救い主テオドールとを混同してしまっていた。途中でほとんどの者が死んだ。モーセ作戦のときも、スーダンに行くまでに死者が出た。今回、3 度目の正直であったのか、今度は真に奇跡が起きた一文明の利器によりみんな空を飛んだのだから。

筆者は学部長特別研究費の助成を受け、平成 16 年 2 月下旬にエチオピアのアディスアベバにあるボレ国際空港に降り立った。アフリカ渡航は今回初めてだったので、事前に黄熱病の予防接種を受けたり、たった数日間の滞在であるのに、東京のエチオピア大使館にパスポートを送ってビザを取得したり、エチオピア国内を移動するために現地の旅行会社に個人手配旅行をお願いしたりと準備が大変であった。気候は思ったほど暑くはなかったが、ホテルも外国人旅行者向けの高級ホテルに泊まらなければならなかったし、英語を話せるガイドと車プラス運転手を手配しなければ、行きたいところには行けないので、欧米に行くより費用がかかったことになる。しかし、そこには、一昔前の生活が息づいていて、なつかしい匂いがした。アディスの通りは若い人で溢れていた。誇り高い国民であるが、同時に非常に親切な人たちであった。ファラシャ村があるゴンダールに 1 泊した。その村に残っている人たちはほとんどいなかったが、自動車が来たのを見て子どもたちが集まってきた。観光客がときどきやってくるようだった。「ダビデの星」を載いたライオン像の瀬戸物を焼いて販売している。筆者はアフリカの専門家ではないが、ユダヤ研究の延長から、ナウム氏の洋書の邦訳を始めることになった。今回は、紙数の制限上その一部を発表させていただいた次第である。

〔これは平成 15 年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成を受けました。掲載写真は全て鈴木元子が平成 16 年 2 月にエチオピアで撮影してきたものです。〕



写真 4 現在のファラシャ村の入口にある看板。



写真 5 ファラシャ村で

注

- 1) エゼキエル書 27 : 22。その他、シェバの隊商については、「ヨブ記」(6:19) に、また奴隷商人については「ヨエル書」(4 : 8) に記録されている。蛇足になるが、面白いのは、預言者イザヤの書(60 : 6)において、救いが到来するメシアの時代(終末)に、聖地エルサレムに「シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る」と預言されていることである。
- 2) アメリカは過去においてはエチオピアの友好国だった。1950 年代初頭、アメリカは当時エチオピアの領土であったエリトリアの首都アスマラにカグニュー空軍基地を建設しており、4 千人のアメリカ兵を配置していた。アラビア半島からスエズ運河を航行する石油の輸送航路を確保するためであった。1930 年に王座についたハイレ・セラシエはアメリカのみでなく、イギリス、スウェーデン、イスラエル、インドおよびユーゴスラビアに、自国の軍隊の訓練をさせた。メンギスツ政権になってからは、ソ連と東ヨーロッパ連合がその役を担うようになった。しかし、やがて、ソ連からも捨てられ、国家破産寸前になると、メンギスツはアメリカを呼び戻そうと躍起になり、イスラエルの提案する援助プログラムよりも武器を欲した。そして、ファラシャ問題こそが、彼の手にあるとおきの手になったのである。ジョージ・ブッシュ大統領は、アフリカ局の次官補ハーマン・コーヘンをエチオピアに送ることに同意した。(ナウム元大使著書より)
- 3) カサがイスラエルから手づらで帰国したことの外見を取り繕うために、ルブラニはイギリスからビジネス界の 2 人のユダヤ人大物の訪問を手配していた。ヨーロッパ最大級の織物生産業者の 1 人で、リパプールから来たサー・デイビッド・アライアンスとヨーロッパ最大の青果卸売業者のサミ・シメオンであった。内線の只中に、これら大物ビジネスマンがアディスのような場所を訪問しようとしているのを知って、エチオピア政府は喜んだ。カサでさえ感動した。ロンドン市民たちは、本当に、ミツヴァ(善行)をしてくれた。その月、1 月には、1,038 名という記録的なファラシャの移住が実現したのである。(ナウム元大使著書より)

参考文献

- アベベ、ダニエル(山田一廣訳)『目で見る世界の国々 57 エチオピア』国土社、2001 年。
- Bard, Mitchell Geoffrey. *From Tragedy to Triumph: The Politics Behind the Rescue of Ethiopian Jewry*. Westport, Connecticut and London: Praeger Publishers, 2002.
- ギルバート、マーティン(池田智訳)『ユダヤ人の歴史地図』明石書店、2000 年。
- 伊谷純一郎他監修『アフリカを知る事典』平凡社、1989 年、1999 年。
- Lestau, Wolf. *Falasha Anthology: Translated from Ethiopic Sources*. New Haven and London: Yale University Press, 1951, 1979.
- Naim, Asher. *Saving the Lost Tribe: the Rescue and Redemption on the Ethiopian Jews*. New York: Ballantine Books, 2003.
- 岡倉登志『エチオピアの歴史―“シェバの女王の国”から“赤い帝国”崩壊まで』明石書店、1999 年。
- 岡倉登志、北川勝彦『日本―アフリカ交流史：明治期から第二次世界大戦期まで』同文館、1993 年。
- 榊原康夫『イスラエルの歴史』小峯書店、1971 年、1976 年。
- Yilma, Shmuel. *From Falasha to Freedom: An Ethiopian Jew's Journey to Jerusalem*. Jerusalem: Gefen Publishing House, 1996.
- 『アルヴァレス エチオピア王国誌』(池上岑夫・長島信弘訳)岩波書店、1980 年。
- 『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社、1995 年。
- 『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1998 年。
- 『聖書辞典』新教出版社、1968 年、1984 年。
- 『説教者のための聖書講解―イザヤ書』日本基督教団出版局、1986 年、1991 年。
- 『ユニオンマップ 21 世紀の世界地図』国際地学協会、2001 年。
- Encyclopaedia Judaica*. Jerusalem, Israel: Keter Publishing House, 1966.
- The Interlinear Hebrew-Aramaic Old Testament*. Vol. 3. Jay P. Green, Sr. General Editor and Translator. Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1976, 1993.